



中村俊定文庫
文庫 18
277
1

中村俊定文庫
文庫 18
277
1



自隋落先生著

風俗文選拾遺

東都書肆 青雲堂梓

於予。二與後北。為相識。六曰。於前北。為
也。因。不。得。已。乃。遂。道。其。所。知。以。塞。需。云。

延享改元年中秋前一日

朝隱 貞宇於江東

倚松堂題



先生既小休して浮世を厭やさるる所を
 の救不篇有り出氣して誰か又海に
 十代のあやや提出則昔の及古や
 奇剛氏ふさづき其筆の敏と海を又と其
 人やぶづきのまや不運徳同申の大恩を
 持て不意窓下小浮の北子好虫

延享二年

甲子の秋



風俗文選拾遺一目錄



先生の略系

先生の傳

養氣庵の序

旅の論

憐梅の辞

多葉粉の頌

餅好夏の賦 并序

先生終焉の記

先生墓碑の文并銘

淑子の傳

正月始て飯を焼の序

吞ち病の傳

書樓の解

前の一目錄

奥殿蔵先主生像



後北華寫

先生の略系 中國出羽生國武藏

中名山濟 家の紋 山形の下以上羽の標

桓武帝六代平貞盛七代

平忠盛

教經

後二位門昭
中納言

教經

後五位上
能登守

武則

二幕平氏為去の存山城山崎小生れ
置石領是より山崎と名系

武則

法次

吉正

次弟

武則

二幕兵部

武則

兵部

貞和六年

武則

別里

二幕兵部

武則

兵部

吉房

刑部

武則

兵部



政年

三ノ系

別政

三ノ系

政武

指下

政安

初解申毛利家
小仕後福山鳥
正則小仕

安江

指下多足より
出羽國山形小侍

守別

法志馬

別成

法志馬

則之

仁志馬出小出小三原休君お侍
正一軍家内二年己丑十月宛

相如

三右衛門に在り五男元禄十二年庚辰の正月
三右衛門の日本の上別出小出小三原休君お侍
倉州の内の中居九郎の母又いさる夫より兄政操乃
育いあり成長十九歳の妻小井播君小侍大坂
小井羽生年父兄の自小三原の家いけり十九歳
秋母いさる廿二歳の妻小三原の家いけり浪浪廿二歳
の妻兄政操いさる二十二年秋本の家いけり秋本治
とよ子の母小故有て秋本を辭れて米津羽君小侍

京都より時廿二歳二条に在り秋と流てゆり廿八
歳のあき米津あを出て市中に在り廿九歳廿二歳
の秋秋元但君一は友し廿八歳の妻小井播君を以て
辭しあり形せりえ名を以て武江の市中に在り
夫より諸あをせ抱りし二十二年の十二月時
大了休氏

先生終馬の記

後北子舟

又文四歳己未十二月時無思庵の主人身まかりぬを
終る時病よりあり其日又八年の各少小あり有と
父母の養に法してゆりさ指肉を求めつるに平
生の好物鯛の夕葵肴ハ鯛の味氣の物漬を
ちし例の酒常よりほく飲る友に流りてみおれ生

らけて甲午年の救き万四千七百七十余の臣官
に其日六の百日弓矢を拵りて脱て八十日酒を
飲む日今日に到て其日海ぬあれあはる死
に到る日一日もあらずと命を命と
かして候あはれ時死共可し卯さの辰かすのじと
に今既に千日の余光心を神仙不舎し終を糜麻
ともしたり命と命と命と一として死ありて
、命年も四つしてをさるる
名斗や月雷地の志あり 糟
と書終り又酒とさるる救きとてを好むい

先生の傳

先生武ほ彦之喜姓知りぬ兒と同じか群
臺丸車と號し先生木石を志し他兒在の子を
飼ふ先生金平牛とぬむ漸く及んで衣靴
冠物前人の異あり諸藩にても自ら心はしと
細かくし是のぬして奥を極め書とよめも解する
事と能せば十六歳して始ては名し廿八歳まで備
君はは皆不ら用うふとめて置れ志して自ら公を
治る先生と云ふ又自ら公を治る他業も書り共
氣遣さし世を憂ふ故にを學りてを能く眼を

阮籍に同じる人引ね人に追従所認するや嫌
人よりとびだす不測不収世と稱し梅とぞれを
眼より白し眼白なる人量不容又加ふる大言を以
て是世を合ざるを自ら知ては是世のまにすれ
之是人に薦せしむる人の薦せしむる
君も不測人への薦せしむるを求めざるは僥倖乃若
利をよまざるは是則自ら取らざるは浮世に
てよりそ平生の癖もよも業といふ月も夜也
斬一時事も梅取雪の日も梅とぞる朝は之に到る
ルとぞる起て茶飯終れば又措にあり夜夢も
そとぞる骨痛は起たれどこの又及則其非を好た
詩文の癖に他の詩文もよまざるも不好俳諧も
菴門の地響に梅よ言曲は不器用之平家三句を
おしりある基も茶も好書もよみん醫者の名不傳
れも廢治とぞるなり神仏を知り不ぞる先王の道と
るは知れぬ由不吹破にば人へも産物もは
るは必益をあり群れ則ては育まざりて是夜
し相度ハ少く及ばざるを以ては廢飲では廢るも
魚蝦の肉を以て一年二百六十日鮮けりたるは
茶好酒好たが好書好遊好の廢好としてなり

魚蝦の肉を以て一年二百六十日鮮けりたるは
茶好酒好たが好書好遊好の廢好としてなり

申す可くぬけても暮るるうらしみとくしとさへあらず
 事ほよかぬと自ら知りて自ら又是自ら時を
 すらし先生やう時杖つ杖つぎは膝刀と常の杖故
 と心は碑石者の道に河ん時やがぎ杖ありと故小杖
 のつらと小刀とも志の刀の杖は杖を志の杖なり或人先生
 小の平生の形ときれとも人小異あり他人を
 先生を杖氣といふと先生の日まを杖氣は杖氣
 杖一又杖氣といふも又杖氣杖一
 と杖一又杖を杖一といふ

武列お豊嶋郡谷中あ日暮里あ

密宗くら 補陀落山ふ 養福寺と

高壹丈



泉院藏先生墓

自隨落先生之墓碑之文并銘

先生ハ武江ノ産ナリ元禄十三庚辰年五月二日
先幼名伊三郎成長シテ山崎三九衛門平相如臣十六
歳ニテ始テ仕官シ卅八歳ニテ五君ニシテ其質不四
ニテ氣隨ヲ以テ性ヲ養若年ニテ諸藝學ト雖奧
ヲ不極心ニ欲スルホド必テ足りヌトシテヤム書ヲ讀
ルヲセズ是故ニ無學ニテ無能ナリ人ニ追從阿諂
嫌ヨク大言ヲ吐故二人ノ薦達ナシコトヲ以君不
去テ隱レ名ヲ山浚明字ハ相ト改其軒ヲ不量軒ト
号シ庵ヲ無思庵ト名ツケ蘇ヲ捨樂齊ト額ニ坊ヲ

蓮坊自ラ隨落先生ト云又藤人氏北華氏云常
宿振ハヲ業トシ鳥獸魚鼈ノ肉ヲ好シ酒ハ李陶ガ未
味ヲ知り醉テハ眠醒テハ卧スウカクコトト曰フ送テ無為
ナリ風雅ハ俳諧ヲ好テ蕉門ノ虚實ニアソビ其次ハ琴友ハ
カラ輪ニ結髪又長シ齒ハ鉄將水ニテ染タリ足ヲハ芒ニ縱
ニ志ス其ハ笈肩ニ難波ノ曙都ノ春松島ノ夕更科
ノ秋見ズ臣トナシ先生常ニ云フアリ體存テ心死タルハ長
ク心存テ體死タルハ短シ月花ニ斲シハ雅ノ雅タリ生前
ニ心ヲ殺テハ隱ノ隱タリ官ヲマメ錢ヲツキテ富貴ト成酒ヲ
飲テ浮世ノ醉覺タリト是皆自ラ隨落スルナリ今年

今日四十歳ニシテ大ニ休ニ眠リヨリテ碑ヲ建具行ヲ記

ミテ書テ其ヲ又テ慰ス銘ニ曰

嗚ハ七也朽ぬとつてバ

雪白ハ月よ明る

神ハ石也このをあら

地自りて名よ鳴け

心も猶もなするハ心也

心も猶も死するハ情

元文四己未歳十二月晦日

後の北華謹書

妻氣壽の序

世に俗多かり水車如く心に急終る者多かり世に俗多かり水車如く心に急終る者多かり
のまは時に百の百の百の世に俗多かり水車如く心に急終る者多かり
し今是を除て去ぐく急の境も枯んとし其の急も去
有る名を物とみ是を而て天憲を繋す時ハ神徳
體伸く其の急も去ぐく急の境も枯んとし其の急も去
おもぬくくくくくく成る深淵の根を去る也物
沖峯の徳老の心は多樹ハ流珠の翠の翠の川柳樹ハ
其教諭者老の物すと其孫を其の孫ハ其の孫ハ
其教諭者老の物すと其孫を其の孫ハ其の孫ハ

の上耶那の物は盧生が忘おさるには釣つれば邦を辟け
 夜の町の代り遊ゆ仙せんはうう樹しゆ守しゆ明めい兒に物ものの若くは
 予が樹しゆふらううのいづれ樹しゆよく九こ夏げの至後ごは必樹しゆ
 の海き或はしり樹やう樹しゆては胸むね後ごおお樹しゆちり樹しゆ樹しゆ
 そ糸そ形ハ智れた月つきをあの不ハ一て樹よく樹しゆは履の若
 介て人の情なさ知らずいづれ樹しゆは詩育よくのほきまたたれ
 登のぬきま海ふぬれらう樹はうづる如ごとくいづれて樹飛ひ
 蒙れり樹が不仕合いもむいは樹れた志あらうる雨乃雨果
 登春のすゆの内うち比ひ翼よく乃乃床とこの上うへ親や子こも浸せる中ちゆう樹
 中ちゆうはすくまんをりしさおも有らうく山一さ時ときもいんと

是これ罪とうくさのほじりとまし平ハ樹不換法はは必履し
 りの没ぼつ者者との下げ司すの業ハ履果実す時の斬ハ大名名も登らずさこ
 正ただし子信しん樹の氣きをあらうといふた一一體たいの内ある
 一一是これ樹を名づけて書氣き果実といふ且樹しゆハ必しめ
 一一も事ハいづら 面めん自じき愛娘にょう一一さ愛らうままさ愛
 一一ままのゆちあれをあらうくましま愛らん守しる事をあ
 一一れ大子し監かん滅めつハ必しつげよ 一一履履言ごんハ必しくた
 一一あらうあく人不信る樹らうづれ
 一一女子しよの樹
 一一履履の増し物ハ必しが系けい羽う二二と大名名の内乃なり持もちの

作り髪を巻くはを松が子と子あつれのいづれの香代
 すりぬきぬきを箱に知れぬ武江西南に赤坂と子あつれ
 不の果有て涌出し赤坂女子と称其形や顔まは
 蓋をせぬき上げ天窓を分八面の新地とほほ何とあ
 坊を備せし髪買ハ糸を名とし耳の上ハ風波の号有
 髪は多髪つり髪りも上げちりとり油墨を面折
 釘の給をせり鼻の下ハ味線の約ありあすばき髪有
 衣服の色ハ紺をさぶ足を紺のけりといふ代色と物一ツ
 して代りあすまや紋所ハ釘費をぬき帯ハ紀伊屋持子とて
 髪は白く小ぢを束を束くして髪を束て結ぶるを天



不すのものとつゞき久しき形にしてさぐり知れ光の
 の種いづれ也形白と知れぬも意に後又志り後を
 おろきとつゞき後を人をも愛しとさぐり知れ後を面白
 き物とつゞき居りた裏面白きもの知れ後にして後を情を知
 りぬ物とさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 るに返くもさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 するのありさるまじきもの知れぬの後の旅するを又
 のつゞき居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 にかり世のつゞき居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 おまじきもの知れぬの後の旅するを又

すは言が原は松焼の女はしりあやめひ戯れ泊る旅
 ちも眉思く油とまぢくあ居るやうの奥座
 きあひ今も美敷なりとや唄へて湯をひ飯をたて免
 むれに配給するやうにさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 浪の女唄集あ酒を仰ぐ付の女茶持来るを後日
 着に踊りてとさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 する物言綴て癒ぬ相かきん月意しりの女唄を只さすり
 川物とさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 じ必泊りてさぐり居り面白きもの知れぬの後の旅するを又
 氣配りさるまじきもの知れぬの後の旅するを又

立ちをちろふち延てしち縁てやちり延て見女たちち
 とさく成てすすぢりの物感し廿の縁何し善の志
 又又義の義もなす有る及くの笑種とよめりけ
 ば多師てくしきぶの河で名おけ旅人の勢づれり凡種
 らもやびむ旅して旅の情を初め暮れたるるれたえよ
 さいおの旅の重れ有月の為にするは河に巴ぐるあまの口腹
 の為する旅おれぬく有るえも旅の面白きは出た登れば宇
 市を更さる寸の内は拙り重直下に見を区林有本林のり
 梢、棲者の集ると見。幾ん、吹凡の秋を待粒ひ有田畑小出
 農業乃有も見。を打節の五穀のほりしも。初。里小入れば

市人の世渡るさむ己が有るに饋きて、喜る者、劣る者、有はつきて
 後方れハ様とあてう進める首づる有るハ、初めハ、お居ハ、株
 多く目や建あてべる中ハ、根枝、朽とが、子、得て、家て、佛
 の棚を、経まで、卵より、見する、心、あると、延、こ、も、あ、と、て、川、中、渡、こ
 ると、善、れ、あ、え、り、が、油、取、て、休、め、る、さ、の、六、六、日、に、く、大、い、あ、る
 命、お、か、へ、つ、こ、う、お、か、へ、つ、こ、う、の、自、由、は、つ、し、ら、る、又、す、の、子、は、な、ら、る
 手、一、お、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち、の、ち
 夜、お、か、へ、つ、こ、う、お、か、へ、つ、こ、う、の、自、由、は、つ、し、ら、る、又、す、の、子、は、な、ら、る
 又、お、か、へ、つ、こ、う、お、か、へ、つ、こ、う、の、自、由、は、つ、し、ら、る、又、す、の、子、は、な、ら、る
 嗚、た、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り

善の

十一

その智恵兵の別弱も君がかしらぬの如く内系丸
 又々と胡と書し水の流るが如く矢の飛に似たり
 この人はその愛れ有る者も其の如き者なり
 其の如き者も其の如き者も其の如き者なり
 有情者有る人なり其の如き者も其の如き者なり
 面白く或は其れも其の如き者も其の如き者なり
 だが其の如き者も其の如き者も其の如き者なり
 者なりと云ふ

正月始て飯を焼の席

大政松之液 万葉の竜門に於て隣家より新年に



昔の

日

雑煮おそれたお膳よ白濁の夜飯をよみおけり元日と云
ふとたひいふ言と暮れし五七も他不在八九又おふ河
十日、若夜の酒もいそいで日くるまで起るやん流く日西
不斜ある比生氣つきて日と寝るに指屈く皆起さぬ
ふたば来いませ飯せうは飯極ひすわが電つめじこい
とあてつゝ物の情をいそむるに情の器なりといふを
あしそ器と成てそ用きがかんてそ器の中をい
ぬ。不は合ある器も。お膳の具と成て指屈か如しと
云ひて又仰ぬかりし付鍋釜飯極しおの食器は何
座中に踊りお、お膳も並指して君ののこまおれさうありと

いふ又さういふお膳のそ用をさうして膳あるは
昔このうち鈍鈍の妻大と海するまはの縁と采あり日
あき時、自ら令せしお膳君の器と成れた一向用を
用ひしむらまはの用有財、用ひ用を財、財む用
の繁あめさういお膳の儀し君必いむむりさうと
いぞ年改り日梅れお膳いませ用をさうしお膳有
下人必を君、海のの妻をのぶはお膳は年始目人の
れくお膳いませお膳の用をさうし君今も昔は
お膳お膳の用を新をいふとこはさういふ
起て世情の哭いふたさう有しさういふの哭たの
のそこ

懸せんやあつて米かき毫に火炬より又足りしてあ
黒の軍やしていづれの日うい毫のあつてあ

憐猫の癖

何一つの瘦猫を大嵐を伏すの力にほこむ爪牙は自金
廿の小孫ハ捕得ずとそむに縄を付く極のえいづる
杉梁に上りて何のいづれ日小兒の顔あるの即ち小孫
あく食の鮮魚をし出階子の下に居て啼く人知れず
子ほじゆが耳小くあつて孫と出乳の爲を自ら悟りて
火炬をいづて瘦る少孫こくれ

吞太郎が傳

吞ちあは何れの家の産をいせわいづれも母を酒星
懐小分も新酒泉の極とて乃りて生れてより
も母乳すくは酒を以て乳かきて育つる漸くあつ及
益酒をぬむゆればのそ暮れに飲む人稀てのむちあつと云
是さう時八日すうり又まゝく鼻つまり古まゝに同し
ゆせう区つ子や百区つめむめは茂筋あり見え
斤記と述りて序の時あままりて將く述りて一十時ハ
しきこい子おあり大あり是を怪ふ又二日癖の如八日に
くれを起すやぶれをう之胸をさすり或は腐糟湯
水靴吸ふ生糸つけたりいづれがししてさくびお心

すなはち付小瓶して瓶度量せよの取違と抄りて
考する内は定酒のけりすすげ又逆酒↑と云ふを
えの生解と成り或人吾ち常小瓶酒すれば必病を
まらに何げやと病のけりを知ていそ酒をいそ
ぶのむち常が口志うべ酒をさる病え未病病案
る酒はさ酒く病をまらに何げ病酒をさる
るを好むのそといひて又七番

多葉粉の頭

系に出致有て物云ましくは煙草をぬくは淋
ぶつまらこ心地でする貧病の電煙煙て茶かきわ

されど煙草の火にけりて害入来りて一言二言の物飲りて
の煙草のいそや合せ辛まの煙草盆共かたりそ
切や飽く時減し飽く時飽く時飽く時飽く時飽く時
也煙草の吸付は情の暢せり又旅の胡撻ぎのいそ
比山仄し海をくね系づく花をづれ茶店に火を乞火繩
也やせり又あき業し職人の体も煙草煙草各付り也
世にあきい人も煙草吸ふるあきるいものも物飲り

書煙草の解

客へ来りて煙草盆を茶屋茶屋酒飯を逐して客を
すよとあきい人小瓶して美味を撰むと貧病ありとい

お鷹ふ吹味するより幸く志るのしほ由據るまといのく下おを
幸とくくたくいえを忘れる客足を捨るに刻とらるる
香味河く却て迷成す。ゆほ是らるる世ぞや世の
法合はまゝといふ町に事大席といふ又成後くあ
の門の常書かゝる常書といふをるの大方に卦とた
氣書の物の用もまゝといふええはかりあめ書といふ也書
を構あゝの要あれが人を撰用べきとらるるの常書人の撰
層を用ゆる見えら世のる常書といふ書換るの囀
ぬも及理ありらる

鉦場の賦 并序

天窓を利刃に縊衣を以て首を存の感を市中に未従
せしよ是を及心者又鉦場をといふ無常を観て抱をき上
観の窓不入といふ窓をいふ又阿訶不まを
やいふを持るもいふ足下の悟及不名をいふ
切に親族に離れるもいふ又一念の浮泡をの飛澤を
己心の浄さを業もいふ或一季者のいふくも奇老きとい
希世法人不見ぬれ者又百世の傳り倒れ或は高の不社会者
長けりえよを失いといふけらふは鉦の子といふ百世の令
と書は是をいふ適世者といふいふ世に捨れ人の或はま
及心といふまのめくも書の心がいふといふ息子の不仁をいふ

ゆけ朝霞を深く 諸君杯がきこむ比鳥のあやむれ様
如く五形下に立朝霞の裾をぬし古釘も足さぬ
のよらつきさむ杖のゆりしこしを杖書古舞の割せぬ
まては流石に散死して市中の巨匠と成るうひなきとし
字の書は道死を者か可なりし今賦して曰
一糸の鏡一つまよの米世をみて感に者か今と歌を思ひ
波れいも志せりまげ衣破れては肩石の肌を
し糸縫切れては足常便の垢切を痛む

風俗文選拾遺巻の巻終

新編 狂人

豊水持

